

松蔭 校長室だより

—校長から保護者の皆さまへのメッセージです—

2016年12月1日 発行

松蔭中学校・高等学校
校長 浅井直光

舌は小さな器官ではあるがよく大言壮語する。(中略)舌を制しうる人は一人もいない。それは制しにくい悪であって死の毒に満ちている。私たちはこの舌で父なる主を賛美し、またその同じ舌で神にかたどって造られた人間をのろっている。同じ口から賛美と呪いが出て来る。わたしの兄弟たちよ。このような事はあるべきでない。(ヤコブの手紙 3:5~10)

『舌を制しうる人は一人もいない』 最近の出来事から私の「悪口」考

「悪口」について脳科学で分析した記事をインターネットで見つけました。それによると、脳は悪口が誰に対して言われているかを判断できないので、「あの人はだめだ」という言葉は、脳にとっては「自分はだめだ」と攻撃されていると受けとめ、ストレスが増幅することになるそうです。スポーツで試合中に相手がミスすればよいのに、と思いつかべること、脳にとっては自分が失敗しろ、と言われてることになるといいます。こうして脳に否定的な言葉が蓄積されていくと脳は疲労し、ますますストレスが溜まる悪循環に陥ることになるのです。

かつてバスケットボール部の顧問をしていた頃、相手チームの選手がファウルプレーをすると、時折「ナイスファウル」などと揶揄する声を出す場面をよく見ました。自分たちのチームのメンバーの脳にもマイナスの作用が起こっていたことでしょうか。もしメールやLINEに人を攻撃するような言葉を書き込んだとしたら、自分の目が見て、自分の脳がストレスを感じるようになるのでしょうか。

先日の全校礼拝で冒頭の聖書の言葉を聞き、昔ある先生が生徒に紹介していた星野富弘さんの詩を思い浮かべました。星野さんは中学校の体育教員でしたが、授業中の事故で頸髄損傷の重傷を負い、肩から下が麻痺した状態になりましたが、口で筆を持ち詩画の創作活動を続けてこられました。

鏡に映る顔を見ながら思った。もう悪口をいうのはやめよう。

私の口から出たことばをいちばん近くで聞くのは、私の耳なのだから。

(星野富弘 花の詩画集「鈴の鳴る道」)

おしゃべりはストレス発散になりますが、愚痴がエスカレートして悪口になることや、わざと人を傷つけるような言葉を口から出さないと我慢できない時があります。つい人に引きずられて、自分に向けられると存在を否定されたように感じる酷い言葉ですら発してしまうこともあります。言ってよいことと、言ってはいけないことを冷静に判断出来ない時があります。子どもと向き合う時、感情がおさまらずにいつまでも「ここがダメ、あれもダメ、いいかげんにして」と言い続けてしまうことがあります。私たちは舌を制していないのです。LINEの悪口や陰口は、星野さんなら「私の手が書いたことばをスマホで一番早く見るのは、私の目なのだから」と言うのかも知れません。

それはさておき、先月は私にとって「悪口」の怖さを考えさせられる1ヶ月でした。宗教週間中の朝の全校礼拝で坪井チャプレンは、沖縄で米軍訓練場建設現場を警備する機動隊員が反対派の市民に対して「土人」「シナ人」と発言した事に触れ、この問題は差別やいじめにもつながることだと話されました。授業時間中に行った特別礼拝では、大阪の聖公会生野センターで在日韓国朝鮮人や障害のある人への支援に取り組む在日2世の呉光現(オ・クアンヒョン)先生から、大阪や神戸でのヘイトスピーチで「殺せ」「死ね」などの言葉が連呼された実態を聞きました。アメリカ大統領選挙ではトランプ氏がヒスパニック、アフリカ系米国人、アジア系米国人に対する偏見に満ちた差別発言を繰り返し、イスラム教徒排斥を声高に叫んでいました。二人の候補が政策そっちのけで互いの振る舞いを非難しあい、相手の発言中に何度も「Wrong!(違う)」と割り込んで叫ぶシーンは、若い世代に見せたくない映像でした。異なる者への寛容の精神を見失い、他者をリスペクトすることを放棄し、相手を拒絶する姿勢を言葉としてたやすく発信している事実、まさに舌を制する人がいないという現実があります。米軍基地問題に関わる市民と行政の対立の先鋭化、在日韓国朝鮮人への民族差別と排外主義思想、人種や宗教的偏見などから生みだされる心が凍り付く表現。目の当たりにする中高校生は、これら言葉をどのように受け止め、処理していくべきなのでしょうか。

目を閉じ耳に栓をして暮らすことは出来ない以上、他者が発する「悪口」に対しては私たち一人ひとりの良心と理性に従って対処しなければなりません。自らが発する「悪口」はどのようにするべきなのでしょうか。一つの対応策として、気持ちの切り替え、ということを考えてみました。人権教育の全校映画会で、原爆投下後の長崎を舞台にした「母と暮らせば」を鑑賞しました。昨年公開されたばかりの新しい映画です。特に中学3年生は、10月に広島市の被爆者の講演を聞き、その後の修学旅行で長崎を訪問し平和学習に取り組んだ直後でしたので、印象的に受け止めた生徒が多かったことでしょうか。私の心に深く残っているシーンは、吉永小百合さん演じる母親が、原爆で亡くなった息子のフィアンセが別の男性と結婚すると聞き、「どうしてあの子(フィアンセ)だけが幸せになるの」と母としての感情を露わにする場面でした。しかし即座に母親は、「ごめん。母さんは言っただけのことです」と、感情を抑えきれず口を衝いて出た言葉を恥じ、詫言の姿に、気持ちの切り替えができる人はとても素敵だと深く感じました。つい酷い言葉や悪口を発することがあっても、行き過ぎた言葉だったと思えば素直に謝り、済まなかったと口に出せることは、何とも素晴らしいことでしょう。生徒たちにはこの母親のような女性になって欲しいとの思いを持ちました。

「舌を制しうる人は…」の聖書の箇所は、しばしば高慢な態度を取っていた自称「使徒」や「預言者」の姿に対する戒めです。何千年もの間続いてきた人間の振る舞いを改めることは難しいでしょう。愚痴をこぼしたり、人のせいにしたり、あの人が悪い、周りが悪いと言ってしまふことは、舌を制していない私たちにとっては仕方がないことかも知れません。しかしその後で、済まないと言いつつ詫言の気持ちへの切り替えが出来れば良いのです。脳を守るためにも「もう終わり!」と切り替えれば良いのです。舌を制することが出来ないならば、言葉が過ぎたら素直に詫言、気持ちを切り替える。そのような知恵を持ち、心がけようと決意することは可能ではないのでしょうか。(裏面へ)

バザーにご協力いただき有り難うございました

11月19日にバザーを開催しました。あいにくの天候でしたが、1710名の方にご来校いただきました。リユース食器でゴミ減量化をはかり、生徒にはマイ箸の持参を推奨するなど、エコや環境を意識した運営も定着してきました。食品の売店では昨年からアレルギー品目の表示をするようになりましたが、これも社会の動きに対応した取り組みです。

かつては学校の古くなった設備を修理したり、足りない物品の購入を主な目的としてバザーを開催していました。記録を調べると、図書館の書籍購入、理科室の整備、部室の修理、テニスコートの修理など校内施設・設備の整備と充実のために生徒による売店の収益金が使用されていました。現在もPTAの方々や千と勢会（同窓会）の売店収益については、生徒活動や学校のためにご寄付いただき、近年では、体育祭などに使用するテントや校舎玄関前のクリスマスイルミネーション、PTA室の備品の購入費用等に充てています。

しかし生徒活動としてのバザーの意義は現在大きく変わり、各クラスの売店収益はその全額を福祉施設や災害の被災者支援の募金、その他の団体などに寄付しています。事前に生徒会を通じ各クラスで検討した結果、今年は収益の8割を「保護犬保護猫カフェ」「わんにゃんプロジェクト」「チャイルドケモハウス」に、2割を日頃生徒たちがボランティア奉仕をしている「特別養護老人ホームきしろ荘」「社会福祉法人神戸真生塾」、そして校内での春と秋のパン販売で生徒に人気の「パン工場なないろ・にじ作業所（障害者就労継続支援事業施設）」に寄付することに決めています。今年の生徒売店の収益は現在集計中ですが、昨年は69万円を寄付しました。

PTA役員の皆様には早い段階からの手作りの品製作や寄贈品販売の準備で大変お世話になりました。またPTAのOGグループの皆様や千と勢会の皆様にも喫茶模擬店、売店を運営していただき、収益を学校にご寄付いただきました。紙面をお借りして御礼申し上げます。最後になりましたが、ご来校いただきました保護者の皆様には、バザーへのご協力に心より感謝します。

秋の中学入試・高校入試説明会

この秋も中学入試・高校推薦入試の説明会を土・日曜日に開催しました。参加者数は中学入試では少子化の影響もあり昨年より微減となっています。高校推薦入試は実施3年目を迎え、ようやく参加者数が上向いてまいりました。さらにアピールしていきたいと考えています。

説明会では多くの生徒の皆さんがお手伝いをしてくださいました。誘導・案内係はいつもの通り生徒会の担当で、ピーノちゃんにも生徒が入ってくれています。クッキング体験では食物部員が、英語教育紹介では中3生徒が協力してくれました。中1生徒20数名は、校内各所で案内を担当しました。

説明会に参加された小学生の保護者の方から「在校生や卒業生から良い学校だと聞いたので」とお話ししかけていただくことがあります。松蔭が生徒や保護者の皆様に支えられていることを確認する瞬間です。深く感謝申し上げます。

急激な少子化を迎えています。教職員一同で松蔭の存在意義を常に確認し、変えてはならないもの、変えねばならないものを見極め、次世代の松蔭の女子教育を創りあげていく所存です。

校内のクリスマスイルミネーション

PTAのバザー収益によるイルミネーションは校舎正面玄関前のロータリーで先月末から点灯しています。冬の下校時刻の午後5時前には生徒がよく写真撮影をしています。保護者の皆様も機会がございましたらどうぞご覧ください。 *点灯時間帯：12月26日頃までの16:30～19:00頃

クラブ加入率の調査結果

課外活動としてのクラブ（部活動）は必修ではありませんので、毎年秋に全クラブ・同好会（文化部18、運動部9、同好会2）の部員数調査を実施しています。各クラブ部員数をもとに学年ごとの加入率を算出すると下表（同好会を含む）のようになりました。

高2～中1 クラブ加入率	高2	高1	中3	中2	中1	全体
文化部	57.8%	61.1%	62.4%	62.1%	45.6%	57.8%
運動部	22.7%	20.2%	27.3%	25.0%	27.2%	24.5%
合計	80.5%	81.3%	89.7%	87.1%	72.8%	82.3%

高3は「引退」後ですので調査対象外です。中3が加入率9割近くで高く、中1の加入率が他学年より低くなっています。毎年の中1生徒は入部時期が遅い傾向にあり、今年も学年進行で増加すると見えています。問題点としては、まず部員数の減少があげられます。特に運動部には部員数が少ないため、他校と合同チームを編成できる競技はまだしも団体戦の出場を諦めざるを得ないクラブがあります。顧問教員の配置についても複数クラブの顧問を兼ねる教員がいます。また放課後の面談や補習などがあり、クラブ指導や活動場所への立ち会いが特に平日にはほとんど出来ていない、という状況もあります。今後これらの課題についても検討を要する段階に来ています。

校長室のリーダー面談

昼休みにクラス委員長、生徒会役員、クラブ部長らと面談してきました。彼女たちは生徒会活動のなかに位置づけられた各部署のリーダーということになります。お弁当を食べながら、数名ずつぎっくばらんに話してみようということで、これまで中1から高3まで6学年70名の生徒が来室してくれました。このリーダー面談のねらいは、生徒集団のなかでのリーダーが、面談を通じて当事者意識を高め、さらにそのリーダーの働きかけによって集団を構成する生徒も成長して欲しい、というものです。集団のなかで人は成長します。担任やクラブ顧問の教員は、学級やクラブの生徒集団を導き、調整する責任がありますが、私も協力して成長の場、気付きの機会づくりに取り組んでいるとご理解いただければ幸いです。短い面談時間ですが、どんなクラスにしたいのか、どんなクラブにしたいのか、どんな生徒会活動としたいのか等々を尋ねると、各自が自分の考えを述べてくれました。クラブ部長の面談については、日時調整や連絡を生徒会の文化委員長、体育委員長にお任せしたところ、見事なマネジメント力でスケジュール管理をしてくださいました。将来に役立つ経験の場を、様々なチャンスをつくって生徒に提供できるよう努めたいと考えています。